

公開講座2017報告

2006年より開催してきた、「親鸞仏教センター 研究員と読む公開輪読会」の名称を変更し、「仏教の言葉に生きる力を見いだしていくことを願う、どなたでもご参加いただける連続講座」という基本姿勢を受け継いで「親鸞仏教センター研究員と学ぶ公開講座」としてリニューアルすることとなった。

本講座は年度ごとに共通テーマを定め、これに関わる問題を各研究員が、それぞれの研究領域から講義するものとなっている。本年度は、2017年11月30日から翌年3月1日にかけて、3名(各4回・全12回)の研究員が受けもった。毎回、僧侶や門徒に限らず、年齢や立場を問わない多くの方にご参加いただき、質疑応答も活発に行われるなど、研究員と参加者の交流の場となった。

そして、本年度の共通テーマは「今、浄土を問い直す」とした。「浄土」は法然や親鸞の門流だけが問題とするものではなく、さまざまな大乘經典に説かれ、大乘仏教思想を特徴づける概念でもある。そのため、仏教と西洋思想との融和が模索された近代においても、「浄土」をとらえ直す試みは、さまざまな角度から試みられてきた。では、現代社会を生きる我々にとって、「浄土」を考えるということは、どのような意味があるのだろうか。我々が生きていくうえにおいて、「浄土」が語られ、教えられてきたということは、いかなる意義を有するのだろうか。こうした課題意識のもと、本年度は3つの講座が開かれた。それぞれの担当研究員から、その一部を報告する。



公開講座の様子

親鸞の浄土観

— 『教行信証』の仏身仏土の巻を読む —

親鸞仏教センター研究員 青柳 英司

親鸞は「現生正定聚」の思想が端的に示しているように、浄土教における救済の現在性を明らかにした仏教者である。しかし一方で、浄土教は死後に阿弥陀仏の浄土へ生まれることを説く教えで



あり、死後の救済を願うものであるという理解も根強い。確かに浄土經典は、基本的に命終を契機として「往生浄土」を語っており、また親鸞の消息類にも、門弟の死を往生と呼ぶ例が見られる。そのため現代の真宗においても、往生をどのようにとらえるかは、議論の中にある。

ただ、親鸞の主著とされる『教行信証』を通して往生の問題を考える場合、仏身仏土を主題とする「真仏土巻」と「化身土巻」は無視できない。もちろん、「難思議往生」は「証巻」の標拳だが、「真仏土巻」もこの言葉を取り上げている。また「化身土巻」の標拳には、「双樹林下往生」と「難思往生」という言葉が見られる。そのため親鸞の往生観・救済観を考える場合には、親鸞の浄土観を前提に据える必要があるだろう。

そして、親鸞は『教行信証』において浄土を、「真」「化」という二つの視点から重層的に論じている。「真仏土」は今現に衆生を照らす常住不変の涅槃界であり、「化身土」は七宝の講堂や菩提樹が聳えるなど、具体的な表現を通して衆生に教えられた世界である。ただ親鸞は阿弥陀仏の浄土に、優劣をつけているわけではない。どちらも本願成就の報土であり、我々の救済に欠くべからざるものである。

では、どうして親鸞は阿弥陀仏の浄土をこのような二つの視点から論じていったのだろうか。そもそも、現代に生きる我々にとって浄土は、いかなる意味を持っているのだろうか。本講座では、これらの問題を念頭に『教行信証』の仏身仏土の巻を読み進めた。

清沢満之と浄土をめぐる問い

親鸞仏教センター研究員 長谷川 琢哉

宗教的な救済を「主観的事実」の内に見いだす清沢満之の精神主義は、しばしば近世的な浄土実在論を乗り越え、近代的な「自己の主体的浄土観」を切り開いたものとして評価されてきた。それは浄土という問題を「いつか・どこか」ではなく、まさしく「いま・ここ」において問おうとする宗教的態度を表わすものであり、そのことは、科学や哲学、倫理といった宗教にとっての「門外」ではなく、宗教経験が成立する「主観的心地」という「門内」を基準とするという立場によって明確化されている。

実際、精神主義は宗教を「公的」な領域から切り離された「私的」な領域に位置づけることによって、きわめて近代的な宗教形態を確立したとも言える。しかしそれは同時に、浄土や救済という事柄の「客観的構成」に対しては無頓着であり、自己の「実験」の外側は問わない（問えない）という立場でもある。それゆえ精神主義は、反面において、宗教的な事柄について「公的」な場面で問にくいという欠点を有しており、それは近代的宗教が共有する陥穽かんせいでもあった。

こうした問題意識を背景としつつ、本講座では、精神主義以前の清沢満之の哲学的な浄土観じゆどくについて、『宗教哲学骸骨』期のテキストなどに遡って検討した。それにより見えてきたのは、清沢は当初からある種の唯心的な浄土観を有していたのだが、しかしそのことは、常に浄土や救済の客観性についての思索との緊張関係のなかで論じられていたということであった。初期の清沢の論考に見られるこうした思想のダイナミズムをとらえ直すことによって、少なくとも精神主義における浄土観を再考するための足がかりが見いだされることとなった。



永遠のいのちから広がる浄土

—『法華経』を読む—

親鸞仏教センター研究員 戸次 顕彰

二十年にわたって比叡山で学んだと伝えられる親鸞には、「誓願一仏乗」という言葉に象徴されるような一乗思想を有する側面が見られる。また、『浄土和讃』では、「久遠くおん実成阿弥陀仏じつじょう 五濁ごじよくの凡

愚をあわれみて 釈迦牟尼仏としめしてぞ 迦耶城がやには応現する」（『真宗聖典』486頁）と述べ、釈尊の本源に久遠のいのちをもつ阿弥陀仏の存在を見ている。この和讃の背景には、歴史上の釈尊に対して本仏を説く『法華経』如来寿量品の影響を想定することができる。そこで大乘經典の中から『法華経』を取り上げ、五濁ごじよく悪世の娑婆しゃばに実現する靈山浄土という世界をたずねることを本講座の課題とした。

かつて天台・法華の世界に身を置いた親鸞が『無量寿経』を「真実の教」としたことの意義をめぐっては、『法華経』と『無量寿経』の思想的相違点を見つめていく視座がもちろん重要である。また一方で、浄土の仏道へと転じた親鸞の思想を読み解く際の視点として、『法華経』の思想との接点を探ることの必要性もある。主に親鸞思想に関心を有する方を対象とする本講座において、この二つの視座によって『法華経』を読み進めた。

大きな関心が集まった事柄の一つとして、「成仏」と「往生」の問題がある。『法華経』はこの娑婆世界を釈尊の仏土として説示し、一乗の完成を「成仏」としており、他の仏土への「往生」としては説かない。またその「成仏」についても授記の主な対象を声聞とする点において、「十方衆生あじやせ」や阿闍世の救いを『無量寿経』や『涅槃経』に求めた親鸞との相違も見えてくる。すなわち親鸞においては、『法華経』の一乗という視座を継承しつつ、『無量寿経』によってさらに一乗の根柢を本願に求めていく面があったといえる。

